

# 『文化資本としての述語制日本語—探究ガイド』

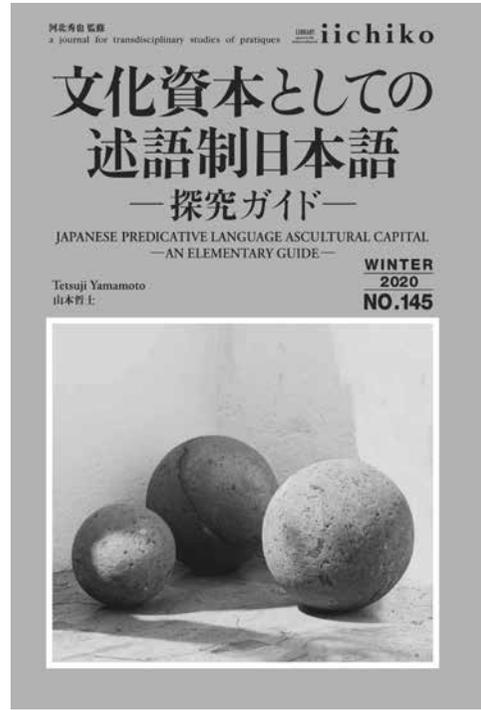
LIBRARY ICHIKO 145 WINTER 2020 1月31日 発売予定

「述語制」は、本誌が創出し提起してきた概念である。文化学を世界第一線の論者たちの参画による言説水準からとらえながら、構造論以降の知的到達点を踏まえ、日本の歴史的蓄積である文化資本・文化技術から実際のな具体の物事の上で「日本」の普遍水準を発見してきた。その地盤に「日本語」が、述語制様式の世界を構築していることが見出された。

金谷武洋の「日本語に主語はない」を契機に金谷特集をくみ、さらに三上章特集をくみ、日本語文法の誤謬を問い返す作業に入り、くわえて格助辞を突きつめておられる浅利誠氏の参画をへて、金谷氏とお二人に連載をしていただき、それは本へとまとめあげた。折しも藤井貞和氏が「文法詩学」をもって助動辞の根源的な見直しを刊行され、その確認をなした。この三者から、日本語を本質的に問い返す回路が開ける。他方、国文法の誤謬が再認識され続けていく様態を、主語制言語様式を集中化・統合している「国家資本」としてクリティカルに観ることを、わたしは国家論・再生産論において物事それ自体を見られなくする〈壁〉として明証化した。

そして、述語制を浮き出させていくには、江戸期の富士谷成章、本居宣長・春庭、鈴木服たちにくわえて、松下大三郎、佐久間鼎、三上章の語法言説を領有していくことである。春庭『詞通路』『詞八衢』を本誌で活字化した。「テニハ」論から「あゆひ」考察へ和語の解明は進んでいったが、そこが理論言説化されていない。さらに、明治期の言文一致の小説の動きが、翻訳や法文化を含み、主語制言語世界と対峙しながら口語文法を作り上げていく。そこに主語制言語様式への疑似転換がなされてしまう。言文一致と邦訳の歴史的考証はかなりしっかりなされているが、クリティアがはつきりしていないため、せつかくの考証が言語理論へ生かされていない。ここは世界の一般文法と一般言語学への批判領有をもってしないと理論生産的にならない。西欧でさえ、品詞も疑われていけば、人称や主語さえ疑われている。基礎批判概念は、「主語制言語様式」と「述語制言語様式」とを対比的にクリティアにおくことである。そして、述語制は、動助辞・静助辞の「述語体系」を理論言説化していかないと「述語制」は、助詞・助動詞としてこれを非自立語、付属語、概念がないと「助」としての現状は主語制概念空間にまだ止まっていることではない。述語は、統率的働きをする概念世界である。主語とされているものが従属語であるのだ。そもそも「subject」に「主語」「主体」など「主」を当てたこと自体が大誤謬である。助詞も「particle」が、冠詞・前置詞・接続詞・間投詞や接頭辞・接尾辞など日本語の概念空間とまったく違うものなのに、当てはめを仮構した。これを屈折語と膠着語の違いなどと仕分けしている限り、日本語の「述辞」と語の間の「繋がり」の高度な理論構造と構成はまったく把握されない。それはコブラではない。コブラなど日本語には無い。

▼山本哲士『文化資本としての述語制日本語・探究へのガイド』▼カラー特集「森とともに暮らす」  
「LIBRARY ICHIKO」は季刊誌です。次号は二〇二〇年四月末発行予定



A5変形 128頁 定価(本体1,500円+税)

【監修・アートディレクター】  
河北秀也(かわきた ひでや)  
1947年生まれ。日本ペリエールアートセンター主宰。著書に『デザイン原論』など。  
本誌プロデューサー、アート・ディレクター。

【編集・ディレクター】  
山本哲士(やまもと てつじ)  
1948年生まれ。  
政治社会学、ホスピタリティ環境学。  
主な著書に、『ミシェル・フーコーの思考体系』、『ホスピタリティ講義』、『国つ神論』、『くもの日本心性』、『高倉健・藤純子の任侠映画と日本情念』、『フーコー国家論』ほか多数。

ご注文はメールか → Fax. 03-3294-2177

文化科学高等研究院出版局 tel.03-3580-7784 fax.03-5730-6084

文化資本としての述語制日本語——探究ガイド

LIBRARY ICHIKO 145 WINTER 2020 1500円(税別)

ISBN 978-4-910131-00-9 C1010 ¥1500E

貴店名

部数